



Medical

子宮頸がんワクチンの公費助成 99.7%の自治体が実施を表明 30代女性が対象外なのはなぜ？

ナビゲーター



医療ジャーナリスト・写真家
伊藤隼也さん

いとう・しゅんや 国内外を問わずさまざまな医療現場取材を精力的に行う。フジテレビ系「とくダネ」でメディカルアドバイザーを務めるほか、多数のメディアを通じ、患者目線の情報を発信。'09年には「編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞」大賞を受賞。

「子宮頸がんワクチン」は子宮頸がんを予防できない？
昨年11月、国の公費助成が決定した子宮頸がんワクチン。厚労省が今年1月末に発表した調査によると、すでに99.7%の自治体の実施を表明。しかし、ワクチンは子宮頸がんを完全に予防できない、ということも存在し、どうか。
このワクチンは、あくまで子宮頸がんの原因とされるヒトパピローマウイルス(以下、HPV)の感染を防ぐためのもの。現在、日本で接種可能なのは、発がん性HPV約15種類の中で、20〜30代の子宮

頸がん患者の約70%から見つかっている2種類に限定的に効果があるワクチン。接種したからといって、HPV感染を100%防げるわけでも、子宮頸がんを完全に防げるわけでもありません。
また、病気自体は20代後半から30代の女性に多く発症。しかし、公費助成の対象が小・中学生なのは、予防効果が高いといわれる、性体験のない年齢層が対象だからです。HPVはどこにでも存在する常在菌。だれでも感染する可能性がある。その経路は性交渉がほとんど。つまり、性体験があるとワクチン

意外と知らない!!

素朴な疑問Q&A

Q ヒトパピローマウイルスっていったい何？

A 皮膚や粘膜に感染するウイルスで、その種類はなんと100種類以上とも。そのうち子宮頸がんを引き起こすのは「ハイリスク型」と呼ばれる、発がん性の約15種。性体験のある女性の約80%が一生に一度は感染するといわれるが90%は自然に消失。消失しなかった一部の感染が持続すると「前がん状態」へと発展する。

Q 子宮頸がんはどんな症状が出る？

A 子宮頸がんを発症しても、初期は自覚症状がないことがほとんど。そのため、不正出血や性交時の出血、おりものの異常、腰痛など、体の異変に気づいたときには、がんがかなり進行しているということも少なくない。治療法としては、手術で病巣を取り除いたり、放射線治療、抗がん剤による化学療法がある。

Q もし発症したら、妊娠・出産は…？

A 「前がん状態」や、がんのごく初期の段階で見えれば、子宮を温存することが可能なため、妊娠も出産も可能。実際、子宮頸がんを発症した妊婦が病巣のみを摘出し、無事出産したという例もある。しかし、がんが進行するにつれ、子宮全摘出や卵巣・卵管の摘出が必要になるため、早期の発見が重要。

参考/子宮頸がん啓発サイト [allwomen.jp]

すぐにがんとは結びつかない 子宮頸がん診断の難しさ

子宮頸がんは症状がほとんどない

根拠で始まったばかりですが、自発的に、任意のHPV検査を受けられるのも賢い選択です。

いので検診で細胞をチェックするのが基本です。そこで顔つきの悪い異形成細胞が見つかったら、「前がん状態」という呼び方をされ、たいていの人は驚き、大慌てになる。知っておきたいのは、異形成細胞が見つかったからといって必ずしもがんになるとは限らないということ。何もせずには戻らないこともあり、それだけ診断が難しい

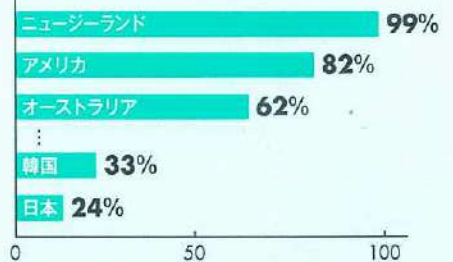
病気と言えます。検診で注意が必要だと言われたら、必ず婦人科腫瘍専門医が常駐する、実績ある病院を受診すべきです。症例の多い病院だと、より正確な診断ができる可能性が高く、不用意に心配をおられることも少ないからです。
実際、私の友人は妊娠中に、「子宮頸がんの可能性が高いから妊娠を中断し早急に手術を」と診断されましたが、別の病院で診てもらったところ手術の必要もなく、赤ちゃんも無事生まれました。これは極端な一例かもしれませんが、子宮頸がんの診断に差があるのは事実。セカンドオピニオンは必須です！
先進国の中でも日本は、医者に比較的可なりやすい分、自分で積極的に調べたり考えたりする人が少ない。どのような病気があつて、どのような予防策を講じるか。その情報を読み解く、メディカルリテラシーが大切です。(談)

Column

世界各国ではどんな取り組みが？ 子宮頸がんの予防策

検診受診率の国別比較

資料/臨床婦人科産科64巻3号より抜粋



厚労省は受診率50%を目標にしているが、実際は24%と目標には程遠い。その背景には自治体を受診率を15%と想定して予算を組んでいた、検査に関わる人員が40%までしか対応できないという現実がある。20〜30代の発症率が高いにもかかわらず、受診率は60代がいちばん高いというズレも。アメリカやイタリアなどでは、受診率は軒並み70〜80%を超え、HPV感染歴検査も実施。オーストラリアでは全額公費で、12〜13歳の女子に学校でワクチンを接種している。